The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	所感
Author(s)	阪田, 廣吉
Citation	懐徳. 1926, 4, p. 3-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88723
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

も依るべけれども、要は積年馴致したる官尊民卑の餘弊より來る一種反抗的向上心の致す處、誰彼となく、只だ『エラク』なるとの希望熾烈にして所謂『エライ』と云ふ所以のもの單に給料生活に限ると心得たるの結果にして、爲に家庭は老壯離散隔居し、地方は荒廢され只管都會集中の弊害を重ぬる有樣とはなれり、而して是等新進有爲の所謂學閥の新人が、平素の心掛なり自己又は其家眷の修養は如何にと見るに、遺憾ながら多く言ふに忍びざるが如きものなきに非らずして、而かも處世の傍ら、公職の餘暇、讀書趣味丈にても保有して切ては自らの進修に努めつゝあるものすら、實に絶無稀有の現況なるは心細き次第ならずや。

前述の如く余は主義として、自己の肩書を得んが爲、若くは就職上の方便上、徒らに高級校の入學を事とするの弊習を痛感する一人なるが、假りに數歩を讓り、是等一種の名譽慾は各自の自由意思に任せ、深くは追究せずとするも、是等有爲の青壯年、即ち新日本の將來を荷負ふべき重責あるの新人諸子が、只何等かの職業に在り附くを以て足れりとし、自己若は家眷の爲に、進修的心掛をも打忘れ、古來堂々たる歴史ある、此懐德堂の如き好機關すら利用せざるに到りては啻に其人の人格の爲に惜むべき而已ならず、各其母校に負ふ責任、延いては母校の存立上國家に蒙る處の義務の爲に允すべからざるものとす、故に余は斯かる意味に於て、本堂が折角の諸設備に關して、市民の志望に應じ能はざるの盛況を觀るに至らざるの今日は、一は未だ充分周知宣傳の足らざるにも職由すべしと雖も、斯道の上に浩歎に堪へざる而已ならず市民の體面、品位、智識程度等に於て、誠に恥づべきの至と言はざるべからず、人は終生學ぶべく、磨くべく、聽くべしにて、彼の六十の手習杯言ふ俗諺の如き、實に前世紀の戯語に過ぎず、朝に道を聽いて夕に死するの決心あるべきなり、我業既に成れりと思ふものゝ如きは、世潮に遲れ、社會に疎せらるる陋劣の甚しき志想とす、猛省せざる可らず。

所感

阪田廣吉

支那と云ふ國は實に困つた國である、治まつたかと思ふと、又動亂が起る、而して日本人の之れに對する考へも、亦始終動いて居るやうで、樂觀して見たり悲觀して見たりして居る。是は詰り支那の事情が分らない結果であるまいか。元來國事を論じ國勢を研究せんとせば、先づ其の國の歴史は勿論、其の國民性を解せなければならぬ。それに就いて私の想ひ起すことは嘗て市村博士が講演された時に、古書の中より面白い記事を發見したとて話された一節である。それは南宋の末の周密と云ふ學者が書いた癸辛雜識と云ふ隨筆の中に在る事だが今の浙江杭州に感慈庵と云ふ寺がある。其の住職は德明と云つて、相當學問もあつた所から大分門下の者もあつた。其の時に日本の僧定心といふのが此の寺に留學して居たが、或る日住職等と一緒に菌を取りに往つた。而して種々の菌を取つて歸り、これを煮て食べた所が忽ち皆が中毒を起した。中には死した者もあつたが、其の際に或る人が來て、園の中毒は人糞を食へば毒消になると告げた。そこで德明和尚は直に人糞を食つて爲に命を助かつた、然るに定心は、拙者は死んでも人糞などは食はぬと力んで、終に五體滅裂して死んで了つたと云ふ話なんである、甚だ面白い話でないか。此の定心と云ふ僧は、相摸國の人だといふことで、眞否は分らぬが、其の所持の度牒の中に、久安（鳥羽天皇の時の年號）保安（近衛天皇の時の年號）など云ふ年號が書いてあつたさうであるから、確かに日本人に相違ない、而して其の事を當時の學者が隨筆の中に書留めた所を見ると、日本人と云ふものは如何にも不思議な國民であると云ふ感想で書いたものらしい。さて日本人と支那人とが此の中毒の際に當つて何故斯樣に態度が違つたか、これが日本人と支那人との國民性の違ふ點である、全体人は生命が一番尊いと云ふことになれば、是は至らざる所なしであるが、生命より他に尊いものがあると云ふことになつて、そこに始めて人間らしい行動が出來得るのである。所が支那人の總ての行動を見ると、大抵利害觀念に支配されないものはない、其の利害觀念の中で最も痛切に感ずるものは、生命財産である。故に此の問題になると支那人の本性が忽ち現はれて來る、即ち支那人の慘忍性を帶びて居ること、利己主義なること、及び附和雷同することなど、總てが其の方面から出ないことはない故に支那の國民性を解釋するには此の利害觀念と云ふ點を捉へないと眞に其の國民性を窺ふことが出來ない。尤も利害の觀念は誰にもない譯ではないが特に支那人に於て痛切に感ぜられる。此の毒菌を食つた場合に、生命は大切であるから、人糞を食つても助からうと云ふのは、生命を非常に重きに置いたものである。然るに人間としては人糞など食ふべきでない、それは豚か犬かである、死んでも犬や豚の行動をすることは出來ないと云ふのが、即ち日本人の特色であつたやうに思はれる、所が此の精神を今日でも尙ほ日本の國民が有つて居るかどうか、私が今日此の事を記した所以は、此の菌問題に就て、支那人の態度が是か、日本人の態度が好いか、若し此の時に於ては、支那人の態度を採る方が好いと云ふならば、日本も餘程モウ支那の國民性に近くなつて來たものと思ふ。若し然らずして日本人の態度好いと感ぜられるならば、まだ日本の國民性が存在して居る譯で、頼もしいことである。西隣の支那とは唇齒輔車の國柄であるから、何處までも親善を謀らねばならぬことは申すまでもないが、國民性を變じてまでもと云ふ譯にはいかぬ。徹頭徹尾定心の意氣があつて欲しいと私は思ふのである。

我郷

林田炭翁

可採紅薇可濯纓。望山鬱鬱水清清。文賢輩出今猶昔。最顯香山學士名。

懐牡丹花叟

牛背遺歌世久傳。人稱地上一神仙。牡丹叟似漆園叟。蝶夢春風四百年。

讀牡丹花隱君遺愛碑

來讀牡丹花叟碑。夏初新綠杜鵑啼。一聲啼過千林靜。今日風流續者誰。

初春欲散歩畏寒而歸

内村無息

探梅問柳事何慵。二月天寒春未濃。爐畔連旬空擁被。門前今日始携筇。晴煙淡淡籠平野。殘雪斑斑横四峯。徊逕長堤行不得。勁風猶刺毳衣重。

春曉對雪

東風何料峭。清曉雪花稠。凜凜徹吟骨。皚皚映睡眸。殘梅猶寄傲。嫩柳轉含愁。起坐依欄處。呼童取敝裘。

春日訪友人村莊

踏春來訪故人家。野鳥盡頭幽逕斜。門外先看詩趣足。綠楊枝雜白桃花。

日暖風恬春藹然。桃花妍笑柳枝眠。一筇來訪林泉友。家在鶯歌燕舞邊。